

小泉十六氏について

当地大泉町に伝わる伝承（故内田伝次郎氏説）によると、楠木正成の嫡子正行の妻**加富貴御前**は、正行が四条畷の戦いで討ち死にした後、南朝の再起を図るために、十六人の家臣団（小泉十六氏）と共に、父の常陸国の国守楠木正訓を頼って上野国（現群馬県）に下向してきたということである。しかし、頼みの父楠木正訓が既にこの世にないことを知り、当地小泉（現大泉町）の地で南朝再起の機会をうかがいつつ、正行ほか楠木一族の供養のために、法志庵という名の草庵を建て、剃髪して尼となったという。

伝承では、加富貴御前は応永9年(1402)に66歳で亡くなっている。正行が四条畷の戦い(1348)で討ち死にした時には、加富貴御前はまだ12歳だったということになる。

その後、御前の霊が白蛇となって現れるようになり、家臣たちは、御前と楠木正成・正行父子を弔うために尉兼（いけん）明神として祀ったという。

私見だが、この尉兼明神という名称は、楠木正成・正行父子の官途左衛門尉兼河内守に由来しているものと思われる。南朝の残党狩りを警戒した末の苦心の呼称なのかもしれない。

ところで、この常陸国の国守楠木正訓という名や記録は、どの文献にも見あたらない。しかし、楠木正成の弟または従兄弟とも言われる**楠木正家（正邦）**が代官として治めた瓜連荘（現那珂市）という正成の領地は、常陸国（現茨城県）にあったものであり、伝承の楠木正訓という名も、この楠木正家の別名または誤伝の可能性もある。国守も代官を誇張したものかもしれない。

もし伝承の楠木正訓が楠木正家だとすると、正成と正家が兄弟ならば、正行と妻加富貴御前は従兄弟の関係となり、正成と正家が従兄弟ならば、正行と妻加富貴御前は再従兄弟（またいとこ）の関係ということになる。

また、楠木正行の妻は、富士山本宮浅間大社大宮司家の富士義勝の娘とする説もあり、楠木正行には、二人の妻がいたことになる。

また、楠木正行の決死の覚悟を察した後村上天皇は、正行を思いとどませようと、南朝方屈指の美女、日野俊基卿の娘「弁内侍」を正室に薦めたという。

弁内侍は正行の死を悲しみ、「大君に 仕へまつるも 今日よりは 心にそむる 墨染の袖」という歌を詠み、髪を切り尼となって正行の霊を弔ったという。その髪塚は今も残っているが、弁内侍の墓がどこにあるかは不明である。

加富貴（かふき）が旧仮名遣いの当て字なら、読みは「こうき」となり、高貴を連想させる。弁内侍が加富貴御前である可能性も考えられる。

いずれにしても、当地に逃れて来た加富貴御前の出自は定かではないが、十六人の家臣団を引き連れてきたという**小泉十六氏**の伝承や、近年まで残っていた御前宿という地名、さらに、南朝方の忠臣として活躍した児島高德開創の高徳寺やその墓が当地大泉町古海に現存すること、また、近隣の館林市には、楠木正成の首を埋めたとされる楠木神社があること、大泉町が新田氏の本拠地（旧新田郡新

田町、現太田市)に近いことなどから、伝承は一定の歴史的事実を色濃く反映しているものと思われる。

ちなみに小泉十六氏とは、先鋒関口門之丞以下、中 帯刀、真下、久保田、佐藤、内田、山口、飯塚、金子、河内、橋本、金井、川島、飯田、原口の各氏である。(一氏不明)

なお、中(那珂?)家には、昭和37年に三笠宮殿下が大泉に行幸された際に拝謁されたという「建武二年 楠木正成」の銘のある「亀蛇の鈴」なるものが、代々相伝されていると言う。

また、太田市古戸町在住の原口家の現当主原口榮一氏によると、先祖は摂津から来たと言われ代々言い伝えられてきたとのことであり、小泉十六氏についても小泉十六騎と言われ代々言い伝えられてきたとのことである。

佐藤家でも、先祖は伊勢から移り住んだと言われ代々言い伝えられているとのことである。摂津も伊勢も南朝ゆかりの地である。

参考文献 河内悟作著 「大泉の史跡を訪ねて」他